

# 言語学は分析対象をいかに拡大できるか

—— 閉塞状況からの脱出に向けて ——\*

児 玉 徳 美

## 1. はじめに：このままでいいのか…

時代は常に変化している。そのことを最近実感した。日本英文学会第78回大会の最終日（2006年5月21日）に特別シンポジウム「このままでいいのか大学英語教育」に参加したときのことである。いつもは教育のテーマではなく、英文学や英語学の研究を発表する場となる英文学会大会がこのような企画を立てること自体が異例である。それはともかく、シンポジウムでは父母・産業界・文部科学省が「コミュニケーション」「国際化」と称して小学校から大学に至るまで speaking, listening 中心の英語教育を望み、それを推進しようとしているのに対して、大学現場の教師は「話し・聞く」能力の涵養も英語教育の重要な一部であると認めるが、「話し・聞く」能力に偏重する英語教育の目標に疑問をもち、「コミュニケーション」や「国際化」の意味をより広い視点から捉えようとしている。こうした考え方の違いや価値観のズレがシンポジウムの「このままでいいのか…」に現れていた。

価値観の対立は、社会環境や文化状況の影響を受け、当事者と第三者の間だけでなく、個人によってもみられる。現代は価値観が急激に変化しており、「このままでいいのか…」の現象には事欠かない。教育に限らず、政治・経済・文化のいろんな分野で時代の変化を感じる。しかし筆者の当面の関心は社会における言語の使われ方や役割にある。われわれはことばに託して自らの意図や主張を表す。意図や主張の背後には価値観が埋め込まれている。これは諸言語に共通する特徴であるが、具体的に主張や価値観との関連でことばがどのように用いられるかについては言語社会固有の特徴もみられる。筆者としては特に日本の言語使用や背後でそれを支える言語意識、あるいはそうした問題を分析する言語学のあり方が気にかかる。「このままでいいのか日本の言説」「このままでいいのか言語学」という疑問がある。

17世紀以降、長い間、精神（心）は現実を映す鏡にたとえられ、知識は鏡に映る映像（現実）を正確に表すとみられていた。この場合、現実とは真理・理性・普遍性・客観性に読み替えてもよい。この知識を獲得するためには、教育によりいかに鏡をみがきあげることが重要であった。しかし20世紀中頃になると、こうした啓蒙主義的な認識論を放棄すべきという主張が出てきた。知識を形成し知識と等号で結ばれる「精神」の存在を否定し、現実に接近するためにことばそのものの使用に関心に向けていった（詳しくは児玉2002:210参照）。Wittgensteinに代表される20世紀の「言語論的転回」は伝統的な認識論の代案として具体的に「知の理論」を提示しているわけではなく、完結しているわけでもない。知識・精神・現実・言語はそれぞれ直結するものではないが、その諸関係は種としての人間の行動の基底にあって人間とは何かを問うものであり、容易に解決できるものではない。ここでは言語表現と価値観の関係を中心に考察し、「言語論的転回」にいささかなりとも役立てば幸いである。

本稿は一方で20世紀の言語学の跡をたどったあと、本来の言語学として言語活動の全域に迫るため分析対象を拡大する必要があることを論じ、他方では言語表現と話し手の主張や価値観との関係を問いながら、特に日本の言説の問題点を考察する。最後に、今後の言語学に求められる課題を示す。言語学が今日の閉塞状況から脱出し、言語活動の全体像に迫るためには、言語表現を含む人間のふるまいを形成する多様な因子を統合する必要がある。当然の帰結として、言語と他の人文社会現象との共通基盤を探ることが要請される。表題は児玉（2006）の主眼の1つであり、本稿の主張や用例の多くが児玉（2006）と重複することをあらかじめことわっておく。

## 2. 20世紀の言語学

20世紀の言語学界は2度の言語革命を経験した。最初はSaussure（1916）であり、2度目はChomsky（1957）後の生成文法である。Saussureは通時的研究が主流であった当時の言語学界の中であって、言語の諸単位の関係が差異対立に基づいて構造をなすことを共時的に解明しようとし、Chomskyは言語能力の多くが生得的能力に由来し、諸言語の構造に存在する普遍性を追究することが言語学の目標であるとした。両者には言語観や分析法に違いがあるにしても、共通点もある。

第1に、理想的な話し手・聞き手の言語知識を対象にした。ここでは個人差や場面などの文脈情報、価値観などの主観的判断は排除された。自然科学は理想的な条件を実験室に設けて自然現象を解明してきた。人文社会科学においても一般化をする際、大なり小なり理想的な条件を仮定している。SaussureやChomskyの特徴はこの理想化を意識的に進めた点にある。

第2に、Saussureは実質（substance）でなく形相（forme）を、Chomskyは機能（function）や意味（meaning）に対置するものとして形式（form）を明らかにすることを目標とした。この形相〔形式〕主義に基づいて分析した結果、意味論はともかく統語論は進展した。

第3に、Saussureはラングを、Chomskyは言語能力を言語学の対象とした。理想的な話し手・聞き手が形相〔形式〕として心に抱くラングや言語能力はそれぞれ実際に発せられるパロールや言語運用ではなく、その基礎をなすものである。ラングや言語能力を明らかにすることにより、ラングや言語能力に関する文法はいずれパロールや言語運用の基本モデルに組み込まれるであろうと考えていた。

上記の3つの特徴は密接に関連しており、「科学」としてできるだけ客観的に言語現象を説明しようとした。しかし結果的に大きく2つの問題が生まれた。1つは言語学が対象とする範囲が縮小し、通例、文を最大の分析単位とするようになったことである。文脈から切り離された文内の語や構文の特質こそ明らかにしたが、文を超える談話の分析からはますます遠ざかっていった。20世紀末頃に言語理論として語彙意味論や構文文法が生まれたが、これも言語学の趨勢を象徴している。今日、言語研究を対象にする学会が数多くあるが、その設立趣意が忘れられ、文内の語彙的・構文的現象に焦点をあてた論文であれば、同じ論文がどの学会でも通用する。自然科学と違って人文社会科学がかつて博士をあまり輩出していなかった時代、人文社会系は「理系ではネズミのしっぽを研究しても博士になれる」とヤユしていたが、今日では言語学でも理系と同じ状況が起きている。特に人文社会現象では寄せ木細工のように部分を並べて全体ができるわけではない。全体には全体の論理が働いている。全体への視点を欠いた分析は必ずしも言語の特徴を示すものとはならない。

第2の問題点は言語学が言語の関連領域に対して提言力を失っていることである。言語学は例えば言語政策や言語教育あるいは言説の分析においてほとんど何も提言していないし、何か提示してくれると社会から期待もされていない。これは歴史的にみても異例の状況である。事のよしあしはともかく、明治以降、例えば国語の制定や戦前の大東亜共栄圏での日本語教育の普及にあたっては多くの言語学者が動員され、中心的な役割をはたした。しかし今日では「21世紀日本の構想」懇談会（河合隼雄座長，河合2000参照）の英語第2公用語化案やその焼き直しともいえる文部科学省の『英語が使える日本人』の育成のための行動計画，あるいは2002年4月より始まった小学校への英語教育導入には言語学者がほとんど関与していない。言語学者の活躍の場は日本語ブームの中で『日本語練習帳』『常識として知っておきたい日本語』『四文字熟語』『問題な日本語』などのように語句の表層的な解説にすぎない。社会における言語の役割や日本語の言説を問題にする発想もみられない。このような言語関連領域の問題は言語学だけで解決できるものではない。しかし言語学が20世紀に抽象化や形式化への道を歩みだして以降，現実の言語活動からますます遠ざかり，言語学は関連領域に対する提言力や分析力を失いつつある。

「言語革命」とまでいわれた抽象化や形式化への道がなぜこんな結果を招いたのであろうか。Chomsky (1957) 後の初期の生成文法やChomsky (1959) の厳しい行動主義批判は当時の心理学や哲学にも大きな衝撃を与え，認知科学を生む契機にもなった。多くの人は生成文法がいずれ統語論の手法を意味論にも拡大し，言語普遍性を人間の心に結びつけ，言語能力と言語運用の関係を明らかにするものと期待していた，しかしそのいずれの期待も容易に実現しそうにないことが1960年代末頃にわかってきた。具体的に言語学への批判を振り返ってみよう。

#### (1) 言語学への批判

- a. 分析対象の狭さ——Lyons (1968), Lakoff (1974), Robinson (1975)
- b. 意味分析の停滞——Jackendoff (1988), Grice (1967, 1989)
- c. 人間不在の言語学——芳賀 (1979), Werth (1999)

(1a) でLyons (1968:51) やLakoff (1974:153) は言語学が形式主義に固執するあまり多くの言語現象を記述しなくなっていることを批判し，形式化を犠牲にしても，もっと言語の動態に注意を向けるべきとし，Robinson (1975) は反生成文法学者の立場からChomsky後の生成文法が視野狭窄 (tunnel vision) に陥り，言語の解明に何ら役立たないと断じた。

これに対して(1b)のJackendoff (1988)は生成文法学者の立場から生成文法への批判の多くが誤解に基づくものであるとしながらも，言語学がかつての華やかさを失い，今や他の隣接領域の関心を惹かず，多くの学生や大学院生を呼び込めなくなった現実を嘆いている。生成意味論が1970年代中頃に解釈意味論との戦いに敗れ，舞台から退場した後，言語学は再び統語論に傾斜し，ますます隣接科学の関心を惹かなくなっていった。このような状況から脱出するためには，言語理論が心を扱う心理学や哲学と関連をもつだけに，心的過程を中心に，より幅広い枠組みをもつことが必要であり，そのためには生成文法が等閑視してきた意味の処理過程の究明が重要であると主張した。Jackendoffが嘆いた状況は残念ながら20年近くたった今も変わっていない。Griceが1967年に行ったハーバード大学でのWilliam James記念講演は発話がいかに展開するかについて体系的な枠組みを提示し，語用論 (pragmatics) の基礎を築いた。その連続講演はその後部分的に論文の形 (例えばLogic and Conversation) で発表されたが，講演の全体が活字になったのは20年以上も後の1989年である。Jackendoff (1988) やGrice (1967) には意味分析に注目し，その重要性を指摘し

た功績がある。しかしJackendoffの提唱する概念意味論 (conceptual semantics) は生成文法の影響の下にあり、語彙意味論 (lexical semantics) と同様に文内の語や構文の意味にとどまっているし、Griceの扱っている談話も隣接する2・3の文に限られる。JackendoffやGriceが進めた意味分析は残念ながら談話全体の意味にまで至っていない。

(1c) の芳賀 (1979) や Werth (1999:18-23) は言語学がいかに人間性を取り戻すべきかを論じている。言語分析に人間の姿が見えてこないのは、言語学がラングや言語能力を対象とし、話し手の意図や価値観などを含む文脈情報を軽視しているため当然のことともいえる。

言語学が閉塞状況から脱出するためには、従来の枠組みにとらわれず、言語活動の全域を視野に入れるよう分析対象を拡大する必要がある。そのためには当面2つの課題が出てくる。1つは意味上、文から談話に至る言語表現を分析することである。形式上、文構造は談話の初めや終わりのどこに位置してもあまり変わることがなく、談話は文を積み重ねたものともいえる。20世紀の言語学が文を最大の単位とすることにあまり矛盾を感じなかったのは、統語論中心に分析を進めたためでもある。しかし意味も分析対象にした場合、事情は大きく異なる。意味上、談話は文を積み重ねたものではない。そこには言外の多様な文脈情報や主張・価値観などが埋め込まれている。全体には全体の論理があり、全体は部分の総和ではない。あと1つの課題は分析対象とする談話が文脈情報の関与する社会で発せられるものだけに、人間の生得的な能力と生後の社会文化的経験に由来する知識を区別し、両者が言語表現にどのようにかわるかを明らかにすることである。

### 3. 分析の対象領域

言語学が分析すべき対象領域として次のものが想定される。

#### (2) 言語分析の対象領域

- a. 言語と形式
- b. 概念と意味
- c. 空間・運動の知覚とそれの他領域 (非物理的領域) への写像転用
- d. 言語表現と世界知識
- e. 言語と思考・文化

#### (3) 意味分析の対象領域

- a. 言語能力としての語・句・節・文などにより指示されるもの
- b. 発話の場面が提供する情報
  - i) 直示表現 (deictic expression) や臨場などにより発話の指示対象を特定する場面情報: 対話者が誰か, 場所・時間・事物などの特定化
  - ii) 発話に直接・間接的に影響を与える場面情報: 対話者の人間関係, 場面の雰囲気 (堅苦しさ・なごやかさなど), 場面での出来事など
- c. 話し手の意図・主張
- d. 話し手の世界についての知識・価値観
- e. 多様な意味領域 (3a-d) の意味を結合させたり異なる言語レベル (2a-e) と意味を対応させる演算過程: (最適原則 best-fit principle に従った) 論理操作・推論 (heuristics) ・

## デフォルト解釈など

言語学が言語活動の全域に迫ろうとすれば、(2a-e) (3a-e) が分析対象となる。(2) は言語そのもの、あるいは言語と非言語世界との関連を示している。そのうち (2a) の意味と形式は言語に不可欠の構成単位である。(2b) の概念は言語化される前の「思い」であり、(2c) の写像転用は意味の拡大であり、いずれも言語の意味と人間の知覚・認知との関係をさしている。(2d,e) は言語と外界の現実世界や人間が関与する社会・思考・文化との関係を問うている。

(3) は (2) の多様な領域に現れる意味の中身を具体的に示している。そのうち (3a) の言語能力 (またはラング) の意味は言語の生成理解を直接導く字義どおりの意味であり、(3b-d) は文脈情報とも呼ばれる意味である。言語能力としての意味は発話では文脈情報により増幅したり逆に特定化したりする。増幅や特定化の変化を受けた意味が言語運用 (またはパロール) の意味である。つまり言語能力は文脈情報という因子により変化する言語運用の適用範囲を示す指標であり、言語能力と言語運用は本来対立するものではない。(3e) は (3a-d) や (2a-e) に現れる意味の相互作用関係を問うものである。(3e) に現れる多様な領域のうち何を分析するかは言語理論によって大きく異なる。

問題は従来の言語学が特に意味分析において (2) (3) のうちどの領域を扱ってきたかである。20世紀の意味論は統語論の強い影響を受け、通例、言語能力としての文内の意味構造を扱ってきた。文脈情報も考慮し、文を超える発話を対象にする語用論や談話分析にしても、多くの場合、隣接する2・3の文からなる発話を対象に、そのつながりや一貫性を考察してきた。いずれも分析対象が極めて限定されており、言語活動の全体像からほど遠いものである。その結果、(2d,e) での言語と世界・思考・文化の関係や (3c-e) での話し手の主張や価値観などは考慮されず、ほとんど言及されることもない。ことばに託して何が語られるかを知り、言語活動の全域に迫るためには、これまで等閑視されてきた領域を分析する必要がある。そのためには分析対象を談話全体にまで拡大することが不可欠となる。

## 4. 言説および言説の秩序

## 4. 1. 言説とその分析法

英語の *discourse* やフランス語の *discours* は多義であり、日本語の談話・文章・テキスト・言説などをさす。日本語では焦点の違いにより含意が異なる。ここでは文を超える談話のうち話し手の主張や価値観が色濃く込められている言説を対象とする。もちろんあらゆる談話に何らかの主張や価値観が込められており、主張や価値観が強いか弱いかは程度の問題でもある。例えば会議の案内文・医者と患者の対話・政党の綱領のようにジャンルによって異なることもある。

次例は第2次大戦直後の1946年に発表された3人の主張である。

- (4) In our time, political speech and writing are largely the defence of the indefensible. Things like the continuance of British rule in India, the Russian purges and deportations, the dropping of the atom bombs on Japan can indeed be defended, but only by arguments which are too brutal for most people to face, and which do not square with the professed aims of political parties.

—George Orwell (1946, 'Politics and the English language')

- (5) 日本の国語ほど、不完全で不便なものはないと思ふ。…私は60年前、森有礼が英語を国語に採用しようとしたことを此戦争中何度々想起した。若しそれが実現してゐたら…日本の文化が今より遙かに進んでゐたであろう事は想像できる。…そこで私は此際、日本は思い切って世界中で一番いい言語、美しい言語をとって、そのまま、国語に採用してはどうかと考へてゐる。それはフランス語が最もいいのではないかと思ふ。

—志賀直哉 (1946, 「国語問題」)

- (6) だまされたということは、不正者による被害を意味するが、しかしだまされたものは正しいとは、古来いかなる辞書にも決して書いてはないのである。だまされたと言へば、いっさいの責任から解放され無条件で正義派になれるよう勘ちがいしている人は、もう一度よく顔を洗い直さなければならぬ。しかも、だまされるもの必ずしも正しくないことを指摘するだけにとどまらず、私はさらに進んで、「だまされるということ自体がすでに一つの悪である」ことを主張したいのである。…そしてだまされるものの罪は、ただ単にだまされたという事実そのものの中にあるのではなく、あんなにも雑作なくだまされるほど批判力を失い、思考力を失い、信念を失い、家畜的な盲従に自己の一切をゆだねるようになってしまっていた国民全体の文化的無気力、無自覚、無反省、無責任などが悪の本体なのである。——伊丹万作 (1946, 「戦争責任者の問題」)

(4) は戦争の蛮行や政治があいまいで陳腐な表現を生んでおり、英語はもっと明晰さを取り戻すべきという Orwell によるエッセイの一節である。ここでは英国のインド支配、ソ連の粛清、日本への原爆投下などのように弁護できないものまで弁護しようとしていることを告発している。Orwell はその後 (1949年) 未来小説の『1984年』を世に出している。そこでは全体主義国の政府役人が世論操作のために意図的に用いるあいまいなことばからなる Newspeak が支配する世界を描いている。いずれにしても Orwell はことばの使用そのものに対して敏感である。

(5) の志賀直哉はあまりにも安穩な言語観をもっており、ことばを用いることを生業とする Orwell と同じ作家であるのかと疑いたくなる。日本が戦争に負けたのは不完全で不便な日本語のせいであり、国語を世界で一番美しいフランス語に代えてはと提案している。志賀は (5) の後で自分は頑固に尺貫法を守り国語の枠外に出られないが、子供たちはメートル法により教育が楽になっているともいう。世界で10進法への移行が同意されて久しいが、いまだに英米ではヤードやポンド法が主流である。志賀がまだ生きていたらこの実態をどう考えるのであろうか。

(6) の伊丹万作は映画監督であり、「無法松の一生」や「手をつなぐ子等」のシナリオを書き、エッセイの名手でもある。(6) によると、だますものとだまされるものがあるのはじめて戦争が起こり、両者の間に戦争責任に軽重の差があることを認めながらも、だまされること自体が一つの悪であり、当時だまされたといつて一切の責任から放免されようとした者たちを批判している。

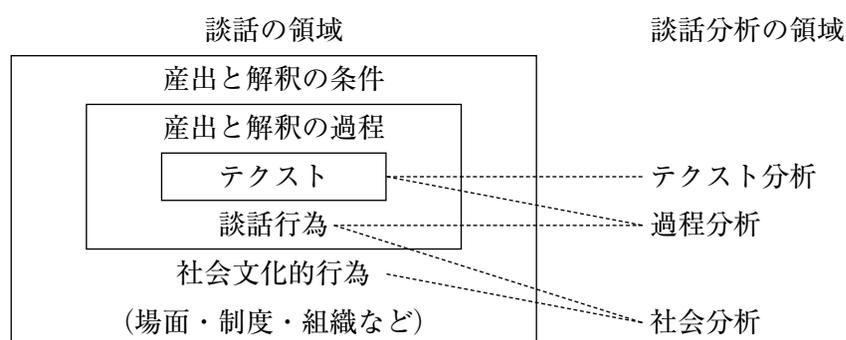
人がことばを用いて語るのは、自明のことながら、語りたいことがあるためである。語る内容はその時その場の喜びであつたり怒りであつたり、他者の語りに共感することもあれば反対することもある。それだけに言語分析としては、一様でない言説の違いや類似点がどこからくるのかを明らかにしてはじめてその目的を達成したことになる。(4) - (6) は個人の言説である。いずれも大戦直後の混乱した状況の中で発せられたものであり、その主張や価値観は一様ではない。(6) は戦争責任を問うものであり、戦争の世紀ともいわれる20世紀の時代相を糾弾する点で、同じ日本人

の志賀よりむしろ（４）のOrwellに近い。フランス語を国語にしてはという（５）の志賀による提案は森有礼（1872）の簡易英語の導入案と同じく根拠のないものであるが、§ 2で言及した「21世紀日本の構想」懇談会（河合隼雄座長）が2000年に提案した英語第2公用語化案も同類である。いずれの提案も趣意が不明確であり実現不可能なものとして、公表後すぐに廃案になった。この130年余りの間、国語問題についての言語意識は少しも進展していないことになる。（４）—（６）の主張と社会との関係については後ほど§ 5. 1の末尾で考察する。

言説の異同を分析するためには、(2d,e) (3c,d)の言語と非言語領域との関連が重要になり、(3e)において各領域の意味をいかに統合処理するかが問われる。言説は個人の発話であるが、同時に社会において発せられるものである。個人と社会の関係を問いながら言説の意味を探る必要がある。

今日、批判的談話分析（Critical Discourse Analysis, 略してCDA）を提唱している一人にFaircloughがいる。Fairclough（1989, 1995）によると、人の主張や発想は一方で社会固有の頸木くびきの中にあって言説の秩序の影響を受け、他方では行為主体者として社会を形成する。つまり言語は政治・経済・文化の面で網の目のようにつながっている社会秩序の産物の1つであり、同時に新しい社会を形成する要素でもある。その主張はFoucault（1970）のいう「言説の秩序」という概念を利用して発展したものである。Fairclough（1989:25,1995:98）は相互に関連する3つの談話領域と3つの談話分析領域を設定している。

#### （7）Fairclough（1989, 1995）の3層



談話領域の中心部は話されたり書かれたテキストであり、そのテキストは談話行為（discourse practice）や社会文化的行為（socio-cultural practice）の産物である。談話行為はテキストを産出・解釈する過程であり、社会文化的行為の一部であり、場面・制度・組織などの社会条件によって規定される。談話分析の領域はこの3層に対応して3つの領域からなる。1つは文法知識を前提にテキストの形式・構造・提示法などのテキスト性を記述するテキスト分析である。2つ目はテキストが産出・解釈される過程とテキストの関係を問う過程分析であり、テキストが通常の商品と同じようにどのように産出され、流通し、消費されるか（つまり聞き手や読者に受容されるか）の過程を考察する。最後は談話行為と社会文化的行為の相互関係を説明する社会分析である（具体的な分析手順については児玉（2006）の第2章§ 4参照）。CDAでは社会条件をつくり出している権力・支配・ヘゲモニー・不平等などが分析のキーワードになっている。本稿ではこのような概念をまとめて価値観と呼ぶ。

CDAでは社会分析と言語分析が密接に結合しており、社会問題はすぐれて言語問題である。社会問題をどのように記述・説明・分析するかはすべて言語を介して処理され、その際、何を判断基

準とするかについては言語表現に埋め込まれている主張・価値観などの内容が問われるためである。

#### 4. 2. 日本の言説の秩序

「言説の秩序」の「秩序」は Foucault (1970) の *L'ordre du discours* の *ordre* を訳したもので、必ずしも整然とした有り様を意味するものではない。「言説の秩序」は特定の社会や時代に構造化され習慣化した言説のスタイルであり、社会の権力体制から押しつけられたり特定の価値観と無意識的に結合した規律であり、堅固な「壁」でもある。その点、養老 (2003) のいう「バカの壁」は「言説の秩序」の一部をなしている。(4) — (6) でみた個人の言説も、各時代や各社会で形成される「言説の秩序」の中に位置づけることにより、客観的に相対化され、その特徴が明確になってくる。

日本の言説の秩序はどのようなものであろうか。この10年ほどの間になされた4人の主張をとりあげてみよう。いずれの主張にも日本の言説に共通する特徴がうかがえる。

- (8) 自衛隊が活動している地域が非戦闘地域である。

——小泉純一郎首相 (2004年11月)

- (9) フランス語は数を勘定できないことばだから国際語として失格している。そういうものにしがみついている手合いが結局、反対のための反対をしている。

——石原慎太郎都知事 (2004年10月)

- (10) われわれは話しをするときに、主語とか目的語を省略するのではなくて、意識せずにしゃべっていることが多いのじゃないでしょうか。…「かあさんがすきよ」といったら「かあさん」が主語みたいに感じませんか。あのときに「私は…」とかなんとかひとつもいわないのですね。「かあさんを」とも言わないでしょう。英語的表現をすると「私は母を愛します」という。ところが、「かあさんがすきだ」と言っているときは、言っている子どもはもうそのなかに入って、消えているぐあいの感じなのです。そういう言い方のできる日本語だと思います。…

真如という観点からすると、私がいって、あなたがいるというのは妄想なのです。全部真如のあらわれとしてみんなが動いているのですから、という考え方なのです。だから非常に大事にしている「私」というものさえ、もう私もあなたもいないというぐらいのすごい区別のない世界というもの、これが世界だということがわかって、いまここに生きている。そのあらわれとして私が生きているというふうな生き方をしましょうというのが仏教の考え方です。…いちばんの底のところのいちばん大事なところは離言だという前提があるのです。だからそのことをうっかり言ったらもう依言真如になりますからね。だからいちばんいいのは、ただ黙っていることになってくるのです。

——河合隼雄 (1996「日本語と日本人の心」)

- (11) お手伝いさんが台所でコップを手からすべり落として、コップが割れてしまったとする。日本人はこのような時「私はコップを割りました」という。聞けばアメリカ人やヨーロッパ人は「コップが割れました」と言うそう。もし「私がコップを割りました」と言うならばそれは、グラスを壁に叩きつけたか、トンカチか何かで叩いたような場合だそう。 「私がコップを割りました」というような言い方をするのは、日本人にはごく普通の言い

方であるが、欧米人には思いもよらない言葉遣いかもしれない。これは日本人の責任感の強さを感じさせる。自分が不注意だったからコップが割れたので、割れた原因は自分にある。そういう意味では自分が壁に叩きついたりしたのと同じである。そう思って「私が割りました」と言うのだ。そう思うとこの簡潔な言い方の中に日本人の素晴らしい道義感が感じられるではないか。だれが言い出したか、教えたか分からないが、日本人にそういった気持ちを根付かせてくれた先祖たちに謹んで頭を下げたい。

——金田一春彦（2000「日本語のこころ」）

（8）は予算委員会で自衛隊を派遣する非戦闘地域はどのような地域かと質問を受け、小泉首相が行った答弁である。明らかに循環論である。自衛隊がバグダッドに行けばバグダッドも非戦闘地域になる。皮肉なことに、事態はその通りに動いている。陸上自衛隊は2006年7月にサマワから無事撤退したが、航空自衛隊はイラクに残り、米国の後方支援と称してバグダッドへも飛ぶ。政府によると、日本の航空自衛隊が飛ぶバグダッド周辺は「非戦闘地域」ということになる。あいまいなことばが行動までもあいまいにしている。

（9）は首都大学東京の支援組織の設立総会で石原都知事が祝辞を述べたときの一節である。「フランス語は数を勘定できないことば」とは例えば80を *quatre-vingts* ( $4 \times 20$ ), 90を *quatre-vingt-dix* ( $4 \times 20 + 10$ ) などという数詞を指していつているのであろう。この論法でいけば英語の *eleven*, *twelve*, *twenty* なども数詞の体系からはみ出しており数を勘定できないことになる。「反対のための反対をしている」手合いとは大学の統合に伴う都立大学の組織改変に反発しているフランス語教師などを指している。偏見ともいえる誤った認識をさも事実であるかのように語り、自分の政策に反対する者を「手合い」と蔑称語で呼んでいる。これは敵対者を攻撃するときの都知事の常套手段である。（5）では志賀がフランス語を「世界で一番いい言語」といい、（9）では石原が「国際語として失格している」と述べ、2人は全く逆の評価をしている。その評価とともに、同じ作家の2人の言語意識も怪しいものと思えてくる。

（10）の前半は日本語では主語も目的語も意識されず、「子ども」が「かあさん」と融合しているという。それでは「かあさんが嫌いよ」「数学が苦手よ」という場合、「子ども」は「かあさん」や「数学」と一体になるとでもいうのであろうか。とんでもない。子どもは河合と違って述語が「好き」「嫌いよ」「苦手だ」などのように、状態を表す場合、その直前の「が」格が主語でないことを大人に教えてもらわなくても直感的に知っている。さらに（10）の後半は依言真如より離言真如のほうがより深いのだという仏教の教えを説いている。解脱ができていない者にとっては馬の耳に念仏かもしれない。河合は小淵元首相の私設諮問機関の「21世紀日本の構想」懇談会の座長を務め、現在文化庁長官である。このようなあいまいな主張が日本の言説の秩序を代表し、日本文化を支配しているのかもしれない。

（11）には二重三重の誤りがみられる。英語では偶然お手伝いさんの手からすべり落ちて「コップが割れた」ときも壁に叩きつけて割ったときも *I broke the glass.* という。日本語では壁に叩きつけたときは「コップを割りました」といい、偶然手が触れて割れた瞬間、お手伝いさんは「（コップが）割れた」というはずである。しかし割れた原因が自分にあることを主人に伝える場合は、日英語とも「私がコップを割りました」、*I broke the glass.* と同じように表現する。英語で「コップが割れた」というのは話し手の関知しない出来事について *I don't know why, but the glass broke.* というような場合に限られる。この日英語の違いは Hinds (1986: 27, 78) が指摘するように、出来

事を記述する際、英語は行為を起こした人に焦点をあてるのに対して、日本語は人を背後に追いやり、出来事の状態に焦点をあてる特質に由来する。この話を又聞きしてか、金田一は日英語の特質を誤解している。より重大な誤りはこのような個別の表現を責任感や道義心にまで直接対応させている点にある。例えば日本語には敬語が発達しているからといっても、日本人が行動面で老人を敬うことに直結しているわけではない。その証拠に、ロンドンと東京で満員のバスや電車で老人を乗せて試してみるとわかる。どちらが早く座れるかは敬語の有無とは全く関係がない。(11)の筆者は50年前にアスペクトの観点から見事に日本語動詞を4種類に分類した金田一(1950)と同一人物かと疑いたくなるほどである。さらにこっけいなことに、この「日本語のこころ」は日本エッセイスト・クラブが編集した2000年度ベスト・エッセイ集全体の表題ともなっている。その本の帯には「日本人特有の心づかいを明かす表題作をはじめエッセイの楽しみを満載の珠玉の61編」とある。しかしまちがった「日本語のこころ」を教えられても、迷惑するのは読者である。

(8)–(11)の発言者は現代日本の政治や文化の先導者である。その発言には論点のすり替えやはぐらかし、詭弁や矛盾した論理、事実誤認に基づく我田引水の主張などがある。さらに困ったことにはその発言が論破されることなく堂々とまかり通っている。こうした状況の基底には「あいまいさ」があり、「あいまいさ」が日本の「言説の秩序」を形成していると考えられる。あいまいな主張はあいまいな因果関係を許し、説明責任の不明確さと連動していく。政治において日本は主張があいまいで「顔」が見えないとしばしば言われる。イラクの大量破壊兵器の有無について判断停止のままの自衛隊派遣、靖国参拝問題、アメリカ産牛肉輸入の再開など、説明のないまま事態だけは進行している。

あいまいさを称揚する主張さえみられる。ここでは2点だけ紹介する。

(12) あいまいさの称揚

a. 21世紀の世界を解く鍵は「曖昧」にある。

——河合隼雄・中沢新一(編)(2003『「あいまい」の知』)

b. 毅然とした判断が必要な時代。それはわかっている。それにしても…。郵政民営化に賛成か反対か。会社は株主のため、それとも社員のため？勝ち組と負け組。負け犬と勝ち犬。最近、何事も白黒つけすぎじゃないか。あえて、「あいまい力」を考えてみた。身につけるべき、魅力ある力だった。

——『アエラ(AERA)』58号(2995.10.31)

河合の「あいまいさ」への信仰は筋金入りである。そのことは(10)からもうかがえるが、河合はさらに中沢と編集した(12a)の本でも積極的にあいまいさの効用を説いており、その本の帯は(12a)のように宣伝している。(12b)は『アエラ』特大号で『「あいまい力」が日本を変える」という6ページにわたる特集記事を企画した記者の弁である。この記者は「あいまいさ」や「あいまい力」を誤解しているのではなかろうか。問題を白か黒かに単純化することが「毅然とした判断」ではないし、まして決着しないで問題を先送りすることが「あいまい力」ではない。問題を単純化することは問題を矮小化し、問題の本質をぼかす危険を常にはらんでいる。郵政民営化にしても重要なことは二項対立の賛成か反対かの判断ではなく、その改革の中身の検討であり、勝ち組と負け組にしても、問われるべきは弱肉強食を生み出した施策の原理原則である。中身や原理原則を議論しないことがあいまいさを許すことになる。

あいまいさを称揚こそしないが、論理に懐疑的な新書本が側面からあいまいさを支えている。次

例は最近の新書本ブームの中で出版された3冊の本の主張である。

(13) 論理に懐疑的な新書本

- a. 論理には抜け道が多くある。——斎藤孝（2004『コミュニケーション力』）
- b. 日本人は…市場経済に代表される，欧米の「論理と合理」に身を売ってしまった。  
——藤原正彦（2005『国家の品格』）
- c. （人は）論理で世界を理解しようと，思っていない [し]，必要を感じていない。  
——養老猛司（2005『無思想の発見』）

上記の3人には，まるで申し合わせたかのように，多くの共通点がみられる。その共通点は「あいまいさ」の基底にある日本人の言語意識を代弁している。

(14) 上記 (13) の共通点

- a. 論理の限界を指摘
- b. 論理に劣らず，あるいは論理に代わるものとして感情・情緒・感覚の意義を訴え，日本人が忘れてしまった伝統文化の復権・回復を説く。
- c. 論理を理性と同一視
- d. ことばへの不信からことばを超えた世界への誘い

(14a) が指摘するように，確かに完全無欠の論理は存在しない。重要なことは不完全なものをいかに補い修正していくかにあるが，(14a) は論理の限界を指摘するだけで，それを克服する方法は他に求めている。(14b) は論理の限界を克服し，論理に代わるものとして感情・情緒・感覚の意義を訴えている。しかし感情・情緒・感覚そのものがあいまいなため伝統文化の復権や回復への道筋は不明確である。またここでは論理を無味乾燥な数式や血も涙もない無機物のようなものと捉えていることにも問題がある。ことばは本来，話し手の意図や主張を指示する機能とともに，話し手の感情を吐露し，聞き手の感情に訴える機能も有している。論理はことばの指示的機能と感情的機能の両面で働いている。喜怒哀楽そのもの，あるいはその因果関係なども当然のことながら論理の対象となるはずである。(14c) の誤りは論理を感情などと対置したことから生じている。(14d) のことばへの不信はすでに19世紀の「神は死んだ」と述べたニーチェの頃から始まっているのかもしれない。20世紀の2度の大戦でこの傾向はますます強くなっている。Orwellは(4)で言語の墮落を指摘したが，その後Steiner (1967) のいう言語の危機はロゴスが沈黙する時代相に移行しているというもので，「アウシュビッツ以後」という時代の中であって現代文明のより強い告発であった。OrwellやSteinerはことばや人間が本来の機能をはたしていないことを批判告発しているが，ことばそのものを放棄しようとしているわけではない。FoucaultやCDAも言語の再構築をはかろうとしている。こうしたヨーロッパの動きと対照的に，日本では，仏教はともかく一般の言語意識では，ことばと論理の関係を正面から見つめてきたことはなく，ことばへの不信がそのままことばを超えた沈黙や感情の世界につながっていく。ここには(10)でみた，依言真如より離言真如がより深いものであるとする仏教の影響がうかがえる。今日ことばの力や説明責任があらゆる分野で求められ，日本の言説の秩序としての「あいまいさ」は減少していると考えられがちであるが，現象はむしろその逆である。「あいまいさ」が再生産され，いっそう強化されている。

言説の秩序は政治の中で最も顕著に現れる。政治は，本来，価値観の違いや対立を鮮明にし，その優劣を競う場のためである。2006年9月20日の自民党総裁選挙を直前にした各種の世論調査によると，次期総裁に望む政策として約半数の者が年金・福祉改革を第1位に挙げていたが，安倍・

谷垣・麻生の3人の候補者はいずれもこの改革を焦点にしていなかった。また次期首相にふさわしい人物として約7割の者が安倍を推したが、その理由は人柄やイメージであり、安倍支持者のうち安倍の発表した政策を知っていると答えた者は約1割にすぎなかった。もっとも、安倍自身「美しい国」を標榜したが、何をもって「美しい」とするかはあいまいなままであり、人によって何とでも解釈できるものであった。世論調査でのイメージ先行の安倍人気に迎合して、国会議員も国民的人気があれば、今後の国政選挙で勝利し与党であり続けられるという期待だけで安倍支持のなだれ現象が起きていた。5年にわたる小泉政権の総括もなく、外交や内政の政策論争も欠いた不思議な選挙戦となった。結果は予想通り、安倍が大勝した。議員にとって自分の価値観や主張を展開する絶好の機会であるはずの総裁選にまであいまいさは浸透していた。互いに将来への思いを心に描きながらも、だれもその思いを語らないまま、羅針盤のない船に乗ろうとしていた。

今日の日本では「あいまいさ」という言説の秩序によりことばが力を失い、その当然の結果として、ものごとに隠されている深層や目に見えない因果関係について思索したり想像する力が衰退している。今や「ことばの力」に変わって「見た目」が大きな比重を占めつつある。一方では「ウザイ、キレル」といってことばを拒否しながら、他方では見かけの「イケメン、キモイ」がまかり通り、ことばを必要としない「波長」の合う仲間だけが群れていく。目に見える情報や出来事を追いかけ、光に照らされた部分の表層的・即物的な情報に満足している。脳内では言語野が眠り、視覚野や聴覚野が活性化している。この状況はIT革命によるテレビ・インターネット・携帯電話・CD・DVDなどの普及と平行して出現し、科学技術のもたらした利便性によってますます深化している。こうした現実を喝破してか、竹内（2005：10）は『人は見た目が9割』と題して、人間が伝達する情報の中でことばが占める比率は7%にすぎないという。現実がそうだからといって、人を外観で判断することを勧めるわけにもいかない。人間の伝達活動コミュニケーションにおいてことばの占める割合は領域によって異なり、一概にいえない。しかし少なくとも価値観や力関係のかかわる領域においては「見た目」に頼ることはできない。科学技術の発展と結合した思考過程の変化は世紀転換期の最大の特徴として世界に広がっており、今後何世紀にもわたって続き、やがては権力体制に組み込まれる恐れもある。日本は伝統的に言語への信頼が薄く、逆に科学技術への信奉が厚くその利便性に頼りがちである。それだけに、ことばの空洞化を防ぎ、あいまいさを克服し、科学技術の発展に対応した新しい原理を見出すことがあらゆる分野において何よりも重要な課題となる。

今日世界を支配しているのは論理でも感情でも「見た目」でもない。政治・経済・軍事上の不透明な力学である。これを明らかにするのがことばや論理や思索である。ことばや論理や思索には人間のもつ知力の限界や生きのびるための保身や独善性の性向が埋め込まれており、また完全無欠な論理や絶対的な真理が存在するわけでもない。だからといって、ことばや論理や思索を放棄して解決できるものではないし、ましてあいまいさや感情や「見た目」によって解決できるものでもない。ことばや論理や思索を介する以外に方法がない。

## 5. 言語表現や人文社会現象を生み出す因子

### 5. 1. 言語表現を生み出す因子

人間は一方では種のHomo sapiens（知恵あるヒト）としてほぼ似た形で生得的能力を発揮し、

他方では社会における環境や条件に応じて異なるふるまいをする。その点、言語表現も社会現象も人間の生得的な能力と生後の社会文化的経験に由来する。つまり言語活動を含む人間のふるまいは脳に基づく広義の認知能力の産物であると同時に、社会におけるコミュニケーションを通して生きのびようとする動機や志向性をもつ社会文化的行為〔慣行〕の産物である。そこから人間のふるまいの普遍性や多様性も生まれてくる。

(15) 言語表現を生み出す因子

生得的な能力（認知能力・言語能力）——生後に習得する言語構造（体系をなす語彙・文法などの言語知識）——言説の秩序——社会・文化を構成する社会文化的行為（場面・制度・組織など）

言語表現の意味は両極の因子とその間にあって生後に習得する言語構造と言説の秩序という因子から形成される。意味全体に通底するものは心的過程であり、それを最もはっきり具現したものが言説の秩序である。なぜなら言説の秩序には、言語構造を介して左辺の言語習得過程と話し手の主張や価値観など右辺の社会・文化からの影響が同時に心的表示されているためである。

言説の秩序という概念を確立することによりはじめて左辺と右辺を統合することが可能になる。左辺や右辺の一方にのみ焦点をあてる分析は言語の全体像を捉えることができない。従来の言語分析や言語論では言説の秩序という概念が存在しなかったため、中核となる言説の秩序に言及しないまま、言語構造の左辺か右辺の一方に片寄ったり、散発的に多様な因子を結合させて論じてきた。例えば構造言語学・生成文法・認知言語学などの言語学理論は（2）（3）でみたように言語構造の左辺が中心である。氏家（1996）、橋本・木村（1997）、鈴木（1998）芳賀（2004）などは言語文化学〔論〕と題しているが、個別の語彙と文化の関係が中心であり、言説（の秩序）が論じられているわけではない。社会における言語の役割を重視する社会言語学はこれまでスピーチ・レベルやコード・スイッチなどの視点から具体的な言説を分析することがあったが、そこでの分析対象は表現方法にとどまっている。社会においてより重要なことは表現内容であるが、言説内での主張や言説の秩序は分析対象となっていない。河合（1996, 2003）はしばしば特定の言語表現と文化の関係を論じているが、彼の関心は右辺の社会文化的行為であり、言語構造については（10）のような錯誤さえみられる。

確かに言説の秩序を論じなくても、語彙が文化の特徴を表すことがある。例えば日本語にはほかし表現が多く、数・性・時制などの概念の区別立てが弱い。また芳賀（2003）が指摘するように、日本人の好む文化指標語句には「秋冷、曙、思いやり、以心伝心、義理、玉虫色、いき、やるせない」などのように自然や周囲との対立を避け、事物のけじめにあいまいなきめの細やかさをもつ語が多い。「あいまいさ」という点では日本の言説の秩序にみられる特徴と同じものが浮かび上がってくる。しかし語彙だけでは言語活動の全体像とは結びつかない。第1に、語彙のあいまいさと言説のあいまいさは名辞と命題の違いにうかがえるように、主張や価値観においてレベルの違いがある。第2に、同じ言語をもちながら異なる言説の秩序や文化をもったり、逆に異なる言語をもちながらも類似の言説の秩序や文化をもつ場合、語彙だけの分析では何も説明できない。第3は言語と思考の関係である。語彙や言語構造が思考を支配することがあるにしても、多くの場合、むしろ逆に思考が先ほど述べた命題や文化と密接に関係することで言語表現を変えていく。思考が埋め込まれている言語活動の全域については言説（の秩序）の考察が不可欠である。

これまで言語と思考・文化の関係についてB.H.Whorfなどの言語相対論とそれに対立する普遍論

の間で論争が続いている。Gumpers and Levinson (1996:25) によると、両者の主張は次のようになる。

(16) Whorf流の三段論法

- a. 異なる言語は情報上等価でない異なる意味表示体系を利用し、
- b. 意味表示は（思考の）概念表示の諸相を決定する。  
したがって
- c. 異なる言語使用者は異なる概念表示を利用する。

(17) 反Whorf流の三段論法

- a. 異なる言語は（同じ意味元素の分子レベルでないにしても少なくとも原子レベルで）同じ意味表示体系を利用し、
- b. 普遍的概念表示は意味体系を決定するが、その意味表示体系は（生得的な「思考言語」である）命題概念体系と同じものである。  
したがって
- c. 異なる言語の使用者は同一の概念表示体系を利用する。

両者は全く逆の主張をしているかにみえる。両者はともに言語と意味・概念・思考の各要素に言及しているが、対象レベルの粗密に違いがあり、分子レベルを論じるか原子レベルを論じるかの違いにすぎない。このような不毛な議論が生じたのも、言語活動で重要な役割をはたす言説の秩序という概念が確立していなかったためである。

言語表現を形成する(15)の因子のうち、言語構造や言説の秩序に関する「可能な文法」はどのような順序で習得されるのであろうか。「可能な文法」について梶田(2004)は大きく出力説と過程説があるという。出力説とは言語知識として文法が一度に習得されるかのように文法全体を習得の出力として規定するもので、今日ほとんどの理論がこれに属する。これに対して過程説は「可能な文法」の全体が一挙に習得されるのではなく、言語以前の段階から1語期、2語期と進み、徐々に大人の文法に近づくと考える。梶田はこの過程説を前提に、文法がより複雑に展開する法則を規定した「動的文法理論」を提唱している。

言語構造や言説の秩序を論じる際、習得過程を無視することはできない。ここでは年齢に基づき大きく臨界期前と臨界期後の2つに分けて考える。いずれの時期も言語が無意識的に習得されるが、両者の間には質的な違いもある。臨界期前の幼児期に習得するものは言語の基本的な発音・語彙・構文などであり、同じ言語集団内で幼児が習得する言語（体系）は均質的で安定している。例えば /l/ と /r/ の区別、SVOかSOVかなどの基本語順、動詞フレーム型か衛星フレーム型かなどである。これに対して、臨界期後に習得するものは社会文化の浸透度に応じて異なる。同じ言語集団内においても個人においても異なることがある。言語（体系）が不安定であり、時の経過とともに変化する萌芽を含んでいる。例えば次のようなものがある。

(18) 臨界期後に習得し、社会文化や個人により異なるもの

- a. 計算能力
- b. 同一言語内での方言や適格性判断
- c. 他者との関係に敏感な日本語の敬語や自称詞・対称詞などの使用
- d. 言説（の秩序）の受容

(18a)の計算能力は言語能力と同じく本来生得的な能力といえる。しかし実際には世界の人々の

間には大きな差が生まれている。1964年の国際数学教育調査によると、13歳生徒（中学2年生）では日本が10か国中最高得点をあげているが、17歳生徒（高校3年生）は12か国中6位の得点に終わっている。調査は少し古いが、学力実態は今もそう変わらないと考えられる（経済協力開発機構OECDが32か国の男女26万5千人を対象に2001年に実施した第1回国際学習到達度調査でも日本の高校1年生は数学的分野で第1位を占めている）。問題は日本の生徒は高学年になるにつれてなぜ成績が平均的な得点に落ちるのかということになる。数や数式は普遍的で万国共通語とみられるが、これは錯覚である。大谷（1997）が指摘するように、数学の学習自体もすぐれて言語文化的な問題で言語が「学力」と密接に関連している。日本の13歳生徒が高得点をとるのは数詞の読み方を利用した乗法九九の学習によるためであり、高学年になるにつれて順位が落ちるのは数式がたまたま歴史的にヨーロッパ語の構造に準じてできあがっているためであるという。例えば $a - b \div c \geq d$ は英語なら *a minus b divided by c is greater than or equal to d.* と数式の順序で読めるが、日本語では漢文のように返り点を打って逆戻りしなければならないことが数学への不適合の原因となっている。

(18b) において英語の結果構文の場合を考えてみよう。結果構文は臨界期前後の頃より習得するが、その用法や意味が限定され、生産性に乏しく（不）適格性の判断に不安定なものがある。例えば「ジョンは金属をハンマーで叩いて平らにした」は *John hammered the metal flat* [??to a pulp]. となり、「ジョンは走って家に帰り、1時間 [1日] いた」は *John ran home for an hour* [??for one day]. となり、[ ] 内の英語は人により容認度が異なる。

(18c) において日本語は自己と他者との関係に敏感であり、その関係を表す表現は多様であり、年齢を重ねるにつれて変化していく。例えば4・5歳の子どもの大人は「坊や、ボク、お嬢ちゃん」などと呼び、自分のことを「おじさん、おばさん、おねいさん」などと呼んだりする。子どもの用いる代名詞の自称詞・対称詞は安定して似たものを用いるが、大人になるにつれ、特に男性は初対面の人に対して適切な自称詞や対称詞に欠けている。どのような自称詞や対称詞を用いるかにより他者との関係が規定されるため、初対面の人との関係を自ら明示するのを躊躇するためである。その点、名刺の交換は相手を名前で呼ぶことが可能になるため大人の男性にとって便利な「儀式」である。明治時代に書かれた文章は漢字の有無により書き手が男か女かが判断できたが、今日ではその違いがみられない。話しことばはその後も長い間男女の違いがみられたが、親しい若者どうしの間では男女の違いがほとんどみられなくなっている。わずかに残っているのが代名詞の自称詞と対称詞であり、その違いもいずれ消えていくと予想される。

(18d) において言説（の秩序）がどのように受容されるかは、(7) の過程分析と社会分析の観点からも興味ある問題である。例えば1946年に発表された(5)(6)の主張は極めて対照的なものである。(5)の志賀は能天気な戦争について無責任とも思えるあいまいな態度であるが、(6)の伊丹は説明責任を厳しく追及する点で現代の時代精神に合致している。日本語は主語を明示せず、状況を中心に記述し、主体者の人を隠すため、責任の所在をあいまいにするとよくいわれる。そうした主張は(10)の河合にもうかがえる。横山(2006:19)は英語が「論理的」であるのに対して、あいまいで「ハラ芸」の日本語は「非論理的」というより「前論理的」とあるとまでいっている。日本語への自信喪失も極まっている。(13) でみた新書本の論理への拒否反応もその裏返しかもしれない。しかし日本人の思考が論理に欠け、あいまいで無責任であるのは決して日本語のせいではない。日本語を用いる個人のせいである。「以心伝心、義理、もったいない」などのように厳密な区別立てを避ける表現が日本の文化指標語句とみなされるのも、多くの日本人が好んで用いた結果

であり、語句そのものに罪はない。どの言語においても、(4)のOrwellが示しているように、あいまいで非〔前〕論理的で無責任な表現が存在する。要はことばを用いる人の思考そのものである。そのことは(5)と(6)が端的に証明している。もっとも、主張・価値観や記述が明確でありさえすれば、そのまま聞き手や読者に素直に受容されるわけではない。社会によっては能天気で無責任な態度に寛容でそれを許すこともある。志賀の立場は(8)―(13)でみた日本の言説の秩序を形成する「あいまいさ」につながり、同じ系譜に属している。このような「あいまいさ」がなぜ許されるかを明らかにするためには、(7)でみた社会分析が不可欠になる。

## 5. 2. 人文社会現象を生み出す因子

(7)との関連で指摘したように、社会問題がすぐれて言語問題であるとするれば、人文社会現象も(15)の言語表現を生み出す因子に似たものによって生みだされていると考えられる。

### (19) 人文社会現象を生み出す因子

生得的な能力（認知能力・言語能力・文化形成能力など）——生後に習得する現象解釈（現象・対人関係などの知識）——社会の秩序——社会・文化を構成する社会文化的行為（場面・制度・組織など）

(19)の両極は(15)とほぼ同じものである。(15)の「言語構造」に対応して(19)は「現象解釈」として「構造」という用語を用いていないが、これは社会の現象・出来事・対人関係などの相互関連がゆるやかなためである。つまり人文社会現象は狭義の文内の言語構造のように、構造全体を構成する諸単位が有機的に結びつき、各単位が互いに予測できるほど必ずしも厳密に規定できないためである。(15)の「言説の秩序」に対応して(19)は「社会の秩序」としているが、「秩序」はいずれも心的表示をさし、§4.2の冒頭で述べた意味である。§4.2でみたように、「あいまいさ」が日本の言説の秩序を形成しているとするれば、同じ特徴が政治・経済・文化のあらゆる面で日本社会の「秩序」も形成しているはずである。

(19)は粗削りな図式であるが、人文社会現象の解明も談話分析と同じように意味を軸に展開し、(15)と同じように生得的な能力と社会文化的行為の両面から人間のふるまいを説明する必要がある。特に社会科学の多くは従来「社会の秩序」を軸にそれより右辺に焦点をあててきたが、§4.2の末尾でみたように、人間が知力の限界や生きるための保身・独善性などの性向をもつとすれば、(19)の左辺をも考察することではじめて人間のふるまいの全域に迫ることができる。(19)の全域を分析対象とすることは複雑系の視点から人文社会システムをホロン構造として分析するホロニクス(holonics)とも一致する(ホロニクスについて詳しくは兎玉(2006)の第4章§4参照)。そこではトップ・ダウン的分析とボトム・アップ的分析の両面から全体と部分の統合をはかっている。

これまで人文社会科学は研究領域によって分析の枠組みが多様に分かれ、互いに無縁な存在として展開してきた。例えば言語学と歴史学や法学・経済学の間で共通の枠組みや方法論を確立しようとする試みはほとんどなされてこなかった。しかし人文社会現象にはすべて人間が関与し、自然現象と異なる共通の特徴も存在するはずである。人文社会科学は(19)の因子相互の関係を究明することによりはじめて人間の関与する現象や出来事の普遍性と多様性を明らかにし、人文社会科学相互の接点を得ることができよう。

## 6. 今後の課題

言語学が今日の閉塞状況から抜け出るためには主に次の3つの課題がある。

(20) 閉塞状況から脱出するために

- a. 意味上, 文から談話・言説に至るまで分析対象を拡大する。
- b. 人の生得的能力と社会文化的経験による知識を区別し, 両者が言動にどのようにかわるかについてその過程を明らかにする。
- c. トップ・ダウン的分析とボトム・アップ的分析の両面から全体と部分の整合性をはかる。

(20a,b) はこれまでに述べたところである。(20c) は閉塞状況から脱出するための最大の課題といえる。人間の関与する現象は孤立して存在しない。特定の現象や要素はそれより大きい上位のものから規定され, より小さい下位のを規定している。特定の言語表現を規定している上位類は言説の秩序や言語共同体社会であり, さらには地球社会であるかもしれない。下位類は言語構造や音韻体系, さらにはそれを可能にしている発声器官であるかもしれない。生得的な能力はそのあらゆるレベルに関与している。全体と部分の統合といっても全体や部分は固定的に規定されるわけではない。それぞれの現象や要素は全体にも部分にもなる。各現象や各要素の上位類からみれば部分となり, 下位類からみれば全体となる。このような関係にある全体と部分の絡み合いが各現象や各要素の存在を安定させている。

分析対象を拡大するためには, 従来の枠組みにとらわれないうで, できるだけ広い全体と整合性をはかる必要がある。ここでは当面, 言語分析で大きな役割をはたす依存関係とデフォルト解釈を考察し, より広い全体から見直したとき, どのような課題が残っているかを示すにとどめる。

依存関係は通例語と語の関係を対象にするが, 広義には意味上, 節と節, 文と文, 段落と段落などをつなぐものでもある。通例語と語の間に主要部前置か主要部後置かの一方依存関係を設定し, 英語などは主要部前置, 日本語などは主要部後置というように, 依存関係は言語によって異なるものとしてきた。しかし広義に, 文と文, 段落と段落の意味上の依存関係はいずれの言語においても主要部前置で展開すると考えられる。

広く言語活動をみたとき, 意味上, 依存関係を一方的なものとしてよいのかという疑問がある。例えば動詞とその主語や目的語となる名詞との結合では, 動詞が統語的にも意味的にも名詞の語順や役割を決定するため, 通例動詞が主要部で名詞が修飾部とされるが, 時にはその逆と思われる現象もみられる。例えば日記やメモなどでは名詞止めの文が多く, 文の主要部である述語が欠けている。これが可能であるのも, 語の連想において動詞が連れてくる名詞より, 名詞が連れてくる動詞のほうが多いためである。また英語は主要部前置というが多くの例外を有し, 日本語は一貫して主要部後置である。さらに中国語は形態論においても統語論においても主要部前置と主要部後置が共存している。その点, 言語類型論は依存関係に基づいて諸言語の語順を類型化することに成功していない。中国語が依存関係に基づいて規定できないとしても, 中国語に依存関係の概念が存在しないわけではない。どの言語においても主要部と修飾部の依存関係は統語的にも意味的にも同じように規定される。問題は主要部と修飾部の語順である。ここで詳述する余裕はないが, 依存関係にある主要部と修飾部が多く言語において統語的にも意味的にもほぼ同じ語順型をもつものに対して, 中国語は異なる語順型をもつだけである。中国語では形態素や語どうしの結合順序が依存関係とは

別の意味を軸に展開し、結果的に統語上の依存関係と意味上の依存関係の語順が違っている。言語類型論としては中国語のように依存関係以外の意味を軸に形成される言語構造をも分析対象にしていく必要がある。意味を軸に分析した場合、談話の生成理解は主要部前置か主要部後置かに関係なく進んでいる。そのことは同じ内容の談話の生成理解に要する時間が諸言語間でほぼ同じであることから証明される。このようにみると、意味上一方依存よりむしろ双方依存ではないか、あるいはカメラで景色を写すように複数の文を一気に生成解釈しているのではないかの疑問さえ出てくる。もちろん一連の語・文・段落を生成理解する過程には依存関係だけでなく、同時に因果関係・写像関係・価値観などの多様な意味と連動している。これをどのように記述するかは今後の課題である。

次にデフォルト解釈の問題に移る。デフォルト解釈とは特定の言語表現と文脈情報が存在する条件の下で必要な情報と不要な情報、関連ある情報と無関係な情報を区別している。従来のデフォルト解釈は言外の意味を含めて文内または隣接する2・3の文間の語句を対象に分析を進めてきた。例えば a male [\*female] nurse/ The house was destroyed [\*built]./ John took a train from Paris to Istanbul. He has family there [\*He likes spaghetti].などの(非)適格性の判断はデフォルト解釈に基づいている。

従来の意味分析は語句や文の包摂関係・選択制限・主観性—客観性・表意—推意などの意味構造を対象としてきたが、そこでは現実世界の知識や認知過程・思考過程なども同時に考慮していたはずである。デフォルト解釈をより広く捉えた場合、文内の意味構造や項構造と談話内の表示フレーム (frame of reference, thought or expression) との間に多くの類似性が認められる。例えば何を話題とするかによって多様な種類の情報が網の目のようにつながってフレームを形成する。このフレームはさらに話題の参考者や文脈状況によって別のフレームと重なって一連のフレーム網 (frame network) をつくる。フレーム網を形成する情報は通例多くの人に共通のものであるが、話題によっては個人や言語集合体により異なることもある。フレーム網の異同は具体的には語彙・構文・文体・主張などに現れる。例えば売買において「太郎は犬を売った／太郎は花子から本を買った」はいえても、「太郎は花子を売った／太郎は犬から本を買った」とはいわないし、「稲、もみ、米、ごはん」と rice, 「麦」と wheat, oats, rye はそれぞれ類似しているが、語彙化が異なる。語と語の結合関係や語内部の意味の焦点化はフレーム網を形成する情報の中で何を選択するかによって違いが生まれる。こうした文法化や語彙化と同様に、命題の集合である(4) — (6)の主張や(8) — (13)でみた日本の言説の秩序においても、フレーム網を形成する命題のうち何を選択するかによって違いが生まれる。つまり語られている主張とともに、語らないが背後で主張を支えている価値観などに異同がみられる。意味分析はこのような意味の多様なふるまい、すなわち類似性の中の異同を明らかにする必要がある。そうすることによって始めて、(3 e)で示した演算過程は、従来の意味分析と(7)でいう過程分析や社会分析とを統合することが可能になる。

上記の依存関係やデフォルト解釈のように分析対象を拡大した場合、言語能力と言語運用の区別そのものの見直しが迫られる。従来、文法の評価尺度としてしばしば単純性が用いられ、簡潔な文法が言語能力を表すとみなされた。しかし現実には簡単な文法が必ずしも言語能力をあらわすわけではない。従来の文法は記述上の条件や制約から言語構造の一部のみを扱い、言語表現に含まれる連想、デフォルト解釈に含まれる認知過程、主張に埋め込まれている価値観など、母語話者が共有する心的過程は分析対象から除外されたためである。このような要素の排除は論理学にもみられる。

論理学と言語学はともに言語表現と現実世界との関係を問うが、その目的が異なる。論理学が言語表現を前提 (premise) にしてどのような可能世界が導かれるかの推論過程を明らかにするのに対して、言語学は言語そのものの形式と意味、および両者の結合関係を対象にする。論理学は厳密な意味をもつ論理語 (&, v, ⊃ など) を用いるのに対して、言語学はあいまいな意味をもつ自然言語を対象とする。その結果、論理学の意味と言語学の意味は必ずしも一致しない。例えば They got married and had a baby と They had a baby and got married. は論理学で p & q, q & p と記述され、同値とみなされるが、自然言語を扱う言語学では通例「結婚後子どもをもうけた」と「子どもができて結婚した」となる。

言語学が対象とする自然言語にあいまいさをもたらすものは語彙や構文に限らない。あいまいさは (3b-d) (7) でみた場面などの文脈情報、上記でみた連想・認知過程・思考過程・価値観などからも生まれる。いずれも自然言語固有の特徴で多様な言説を構成する要素であり、言語分析にとって最も魅力ある領域である。このような要素も対象にすることではじめて言語学は論理学と決別し、言語学固有の役割をはたし、言語活動の全域に迫ることができる。そのためには言語学が20世紀に確立したラングとパロール、あるいは言語能力と言語運用の区別を再検討することが不可欠である。今や振り出しに戻った観があるが、20世紀とは異なる。抽象化や形式化を経た後の振り出しであり、物事が螺旋状に進展する見本である。

\*本稿は2006年7月1日、龍谷大学(大宮キャンパス)で行われた日本語用論学会第3回「談話会」での発表に若干加筆したものである。当日、「談話会」参加者から多くの質問や意見が寄せられたことに感謝する。大方の意見は好意的なもので、今後言語学が分析対象を拡大すべきという点に異論はなかった。その討議の中で分析対象を縮小し特化するやり方は、今日の言語学界で慣習化され制度化されつつあるという鋭い指摘もあった。もし言語学がその「秩序」の中にとどまるならば、その存在意義も危ういものになるだろう。

#### 引用文献

- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague:Mouton.  
 ———. 1959. 'Review of B.F.Skinner, "Verbal Behavior".' *Language* 35:26-58.  
 Fairclough, N. 1989. *Language and Power*. Harlow:Longman.  
 ———1995. *Critical discourse analysis: the study of language*. Harlow: Longman.  
 Foucault, M. 1970. *L'ordre du discours*. Paris:Gallimard. (中村雄二郎訳, 1972『言語表現の秩序』東京:河出書房)  
 藤原正彦. 2005. 『国家の品格』東京:新潮社(新潮新書).  
 Grice, H.P. 1967. *William James lectures delivered at Harvard University*.  
 ———. 1989. *Studies in the Ways of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.  
 Gumpers, J.J. and S.C.Levinson (eds.) 1996. *Rethinking Linguistic Relativity*. Cambridge:Cambridge University Press.  
 芳賀 緩. 1979. 『言語・人間・社会』東京:人間の科学社.  
 ———. 2004. 『日本人らしさの構造—言語文化論講義』東京:大修館書店.  
 橋本和貴夫・木村健治(編) 1997. 『言語文化学講義』吹田:大阪大学出版.  
 Hinds, J. 1986. *Situation vs Person Focus*. 東京:くろしお出版.  
 伊丹万作. 1946. 「戦争責任者の問題」『映画春秋』(8月号)(『伊丹万作全集 第1巻』205-214, 1961, 東京:筑摩書房).  
 Jackendoff, J. 1988. 'Why are they saying these things about us?' *Natural Language and Linguistic Theory* 6: 432-442.

- 梶田 優. 2004. 「<周辺><例外>は周辺・例外か」『日本語学』4 (2): 3-23.
- 河合隼雄. 1996. 「日本語と日本人」大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎 (著)『日本語と日本人』1-70. 東京: 岩波書店.
- (監修). 2000. 『日本のフロンティアは日本の中にある: 自立と協治で築く新世界』東京: 講談社.
- 河合隼雄・中沢新一 (編). 2003. 『「あいまい」の知』東京: 岩波書店.
- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」『言語研究』第15号 (金田一春彦編, 1976『日本語動詞のアスペクト』に再録, 東京: むぎ書房).
- . 2000. 「日本語のこころ」日本エッセイスト・クラブ編『日本語のこころ』172-173. 東京: 文藝春秋.
- 児玉徳美. 2002. 『意味論の対象と方法』東京: くろしお出版.
- . 2006. 『ヒト・ことば・社会』東京: 開拓社.
- Lakoff, G. 1974. Interview in H.Parret 1974, *Discussing Language*. The Hague:Mouton.
- Lyons, J. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大谷泰昭. 1997. 「世界に於ける英語教育の実態と英語の位置」『立命館言語文化研究』9 (2): 7-52.
- Orwell, G. 1946. 'Politics and the English language.' In *Horizon* (April). Also in *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Vol 4* (1970). Hammondswoth:Penguin Books.
- . 1949. *Nineteen Eighty-four*. Hammondswoth:Penguin Books.
- Robinson, I. 1975. *The New Grammarians' Funeral: A critique of Noam Chomsky's linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 斎藤 孝. 2004. 『コミュニケーション力』東京: 岩波書店あ (岩波新書).
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris:Payot.
- 志賀直哉. 1946. 「国語問題」『改造』第1巻4号 (『志賀直哉全集 第7巻』339-343, 1955, 東京: 岩波書店).
- Steiner, G. 1967. *Language and Silence*. Hammondswoth:Penguin Books.
- 鈴木孝夫. 1998. 『言語文化学ノート』東京: 大修館書店.
- 氏家洋子. 1996. 『言語文化学の視点—「言わない」社会と言葉の力—』東京: おうふう.
- 竹内一郎. 2005. 『人は見た目が9割』東京: 新潮社 (新潮新書).
- Werth, P. 1999. *Text Worlds: Representing conceptual space in discourse*. Harlow:Longman.
- 横山雅彦. 2006. 『高校生のための論理思考トレーニング』東京: 筑摩書房 (ちくま新書).
- 養老猛司. 2003. 『バカの壁』東京: 新潮社 (新潮新書).
- . 2005. 『無思想の発見』東京: 筑摩書房 (ちくま新書).

(本学文学部名誉教授)